

琉球大学学術リポジトリ

《社会科》対話を通して社会的な見方や考え方を深め合う生徒の育成：社会参画を志向した授業づくり

メタデータ	言語: 出版者: 琉球大学教育学部附属中学校 公開日: 2015-12-25 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 比嘉, 利博, 玉城, 健一, 知花, 哲也, 里井, 洋一, Satoi, Yoichi メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/20.500.12000/33045

対話を通して社会的な見方や考え方を深め合う生徒の育成

—社会参画を志向した授業づくり—

比嘉利博* 玉城健一* 知花哲也* 里井洋一**

*琉球大学教育学部附属中学校 **琉球大学教育学部

I 主題設定の理由

1 社会的背景

現代社会は知識基盤社会と言われ、グローバル化が進展している反面、エネルギー資源や鉱山資源の争奪戦、領土問題、宗教問題などから偏狭なナショナリズムも台頭している。また、異なる文化や文明の理解・共存とともに国際協力が重要になってくる一方、知識・情報・技術などの国際競争をも加速させている。このような複雑な社会では、広い視野をもって国内外の情勢を見極めるとともに、将来を見通すことが重要となっている。

中学校学習指導要領では、社会科において「世界や日本に関する基礎的教養を培い、国際社会に生き、公共的な事ごとに自ら参画していく資質や能力を育成すること」が重要であると示している。それらを通して、教科目標の「国家・社会の形成者として必要な公民的資質の基礎を養う」ことができる。そのためには、第4期中央教育審議会の答申で示された「我が国や世界の地理や歴史、法や政治、経済等に関する基礎的・基本的な知識、概念や技能を習得し、社会的事象の意味、意義を解釈する学習や事象の特色や事象間の関連を説明する学習などを通して社会的見方や考え方を養う」ことが中学校段階において重要である。

2 これまでの研究

本校は昨年度より研究主題を「未来を切り拓く対話からの学び」としている。これを受け、全教科で知識構成型ジグソー法を基盤とした協調学習に取り組んできた。この学習は、生徒が共有している課題に対して、生徒が考え、対話を通して、考えを他の生徒に説明したり、聞いたりしながら、自分の考えをより質の高いものにしていく学習法である。

これは社会科の「公民的資質」の基礎を養うため、社会的事象に対して、根拠を持って自分の考えを主張するとともに、生徒相互間で解釈を比較・吟味・検討し「社会的な見方、考え方」を深め合う授業にもつながる。

それを受け社会科では、昨年度より研究主題を「対話を通して社会的な見方や考え方を深め合う生徒の育成」と設定し研究を進めてきた。昨年度は、生徒自ら学ぼうとする姿勢が見られ、活発な対話などが見られた反面、主に下記のような反省もあげられる。

・生徒に対する「問い」が生徒の実態に即したものでなかった。
・エキスパート資料の難易度について、それぞれ差があり、生徒がうまく統合できなかった。
・「問い」そのものが複雑で理解できても、うまく他者へ伝えることができなかった。

今年度は、より身近な題材を活用し、生徒の実態に即した課題の設定やエキスパートの資料づくりを行う。そのことで社会的事象に対して活発に対話することで、生徒自身が自分の考えを再構築し、自分なりの考えを持つことができる。このように対話によって社会的な見方や考え方が身につく、将来、社会に参画することができるよう、社会参画を志向する態度を養う。そのためにも年間を通して定期的、計画的に協調学習を行っていく。

3 生徒の実態

全校生徒（465名、欠席者を除く）を対象に社会科学学習に関する意識調査（2014年5月）を実施し、各問とも四択とした。

その結果、「グループ学習は好きか」の問に対し「好き」（51.8%）「やや好き」（37.6%）と回答があり合計89.5%と高い。しかし、「話し合い活動では、活発に議論することができるか」に対しては「で

きる」(22.2%)「ややできる」(43.7%)となり、話し合い活動を難しく感じていることがわかる。これは「学習課題に対して、いろいろ比べたり結びつけたりして、考えることができるか」の間で「できる」「ややできる」が合わせて72.9%となったが、「できる」(22.2%)より「ややできる」(50.8%)が多いことからグループ学習は良いが話し合いとなると、自他の意見を交えて主体的に議論することが難しいことがわかる。社会事象に関して86%の生徒が「興味がある」「ややある」と高い値を示している。しかし、「自分なりの考えを持つことができるか」では「できる」(29.2)「ややできる」(51.4%)で合計80.6%、「それぞれのつながりや理由・背景を考えながら学習を進めることができるか」では「できる」(18.7%)「ややできる」(55.9%)、合計74.6%と低くなっている。この結果から、本校生徒は、グループ活動には好意的ではあるが、話し合い活動となると若干苦手と考えている生徒がいる。これは課題に対し自分の考えを構築したり、他の意見を聞いて比較、検討、吟味したりすることが難しいととらえているためである。また、社会的事象その

ものに興味があっても学習となると、その原因や背景、他の事象とのつながりなど、多くの要素やあらゆる角度から考察する必要があるため、難しいと感じている。

教師は、以上のことから対話など、他者との関わりによって、生徒に社会的な見方や考え方を深めさせることで、生徒が課題に対して自分の解釈を練り直し、学習過程を振り返って自己の思考の変容に気づくことができる。そのため、教師は生徒が主体的に問題を解決するための興味・関心が湧くような教材開発や資料の提示する必要がある。それにより、生徒は人やもの、あるいは実生活などに対して、自分と関連した社会事象とのつながりを見いだすことができ、社会参画を自分事として真剣に考えることができると捉え「社会参画を志向した授業作り」を副主題として設定し、研究を行う。

Ⅱ 研究の目的

本研究では、協調学習の一つである知識構成型ジグソー法を通して、学習課題に対し、自分の考えをまとめる。その中で対話を通して、自分なりの見方

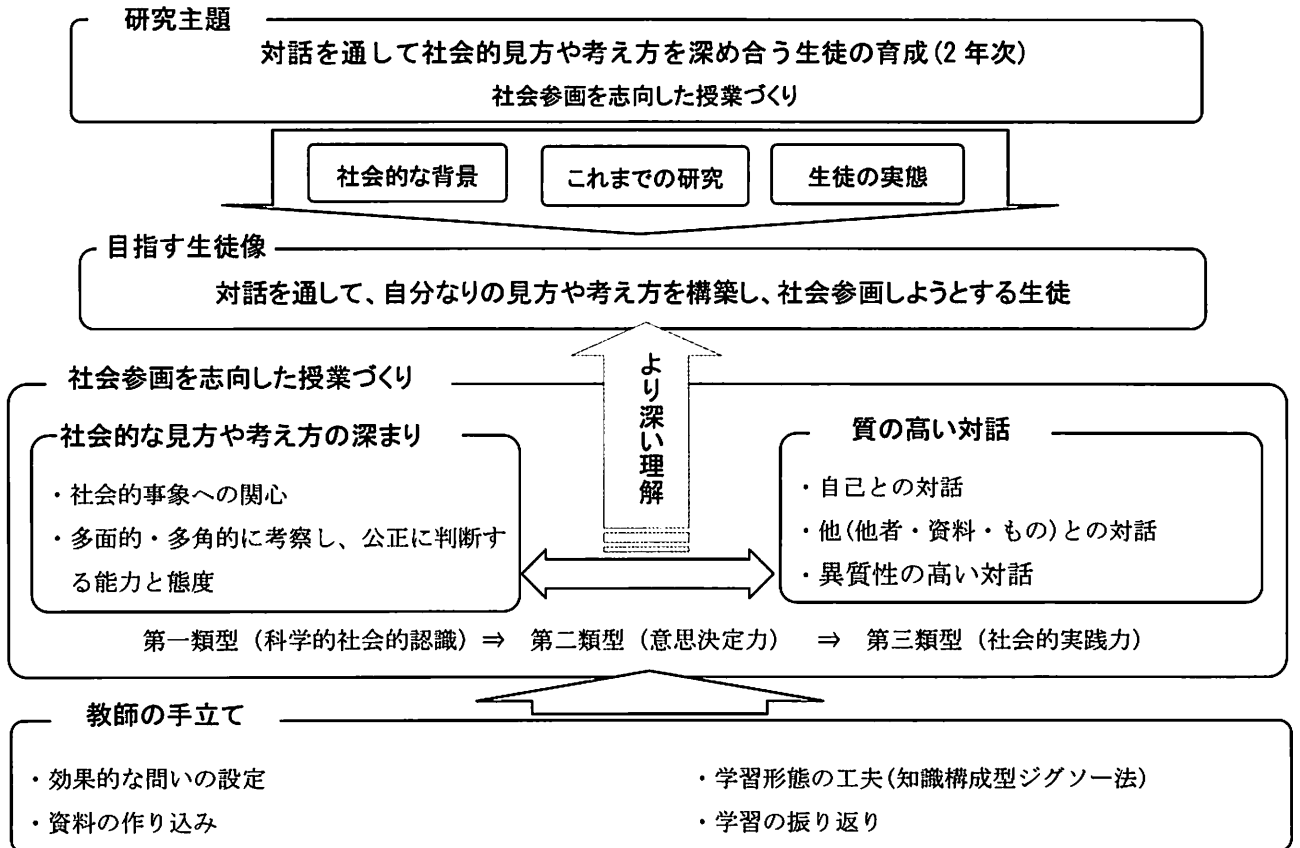


図1 研究構想図

や考え方を再構築し、社会とのつながりのある発展課題を設定し、社会参画しようとする生徒の育成をめざす。

Ⅲ 研究内容

図1は本校社会科の研究内容について図式化したものである。

1 社会的な見方や考え方

岡崎(2013)は社会的な見方とは、数多くの具体的事実(知識)に支えられた概念とし、多くの他者に共有してもらえる社会的見方に基づき価値を持つことが社会的な考え方であるとした。

このことから社会的な見方や考え方とは、社会的事象について、多くの具体的事実で獲得した知識を通し、身についた概念を用いて、根拠や見通しを持って多くの他者に共有してもらえる価値判断をすること、といえる。

2 社会的な見方や考え方の深まり

中学校学習指導要領解説社会編では社会的な見方や考え方について「社会的事象に関心を持って、多面的・多角的に考察し、公正に判断する能力と態度を養い、社会的な見方や考え方を成長させることを一層重視する」とし、その成長を重視しているが、それに対し、岡崎も次のように述べている。

数多くの知識を習得すれば、必ず社会的見方・考え方が深まるわけではない〔省略〕数多くの知識は、原因・結果の関係や目的・手段の関係などで関連づけられて概念となる。つまり、概念を獲得することが、社会的見方が深まったといえる。すなわち、概念をもとに価値を持つことができれば、さらに社会的見方・考え方が深まったといえるだろう⁽¹⁾。

以上のことを踏まえて、社会的な見方や考え方の深まりを發展させて考えてみると、図2になる。多くの具体的事象(知識)を得て、その知識を多面的・多角的に考察することで、多くの概念を獲得することで可能となる。

それが複数の価値を得ることにつながる。そして、

その価値の中から事象に対して、自分で納得できる価値を選択し、合理的な判断ができるのである。

以上のことから多面的・多角的な考察と公正に判断することで、社会的な見方や考え方の深まりにつながる。

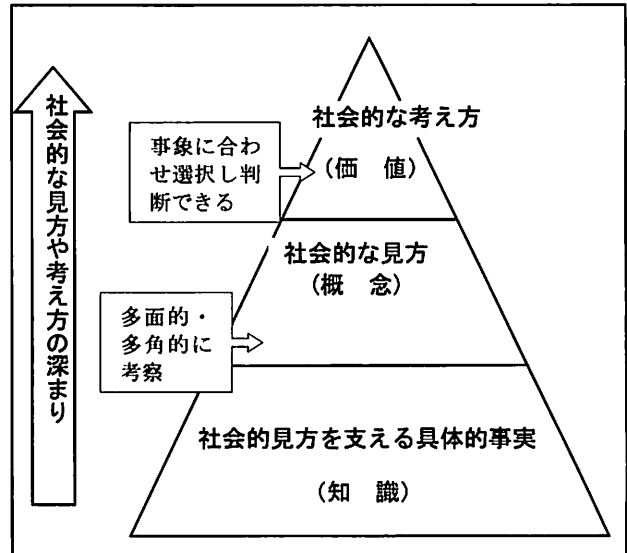


図2 社会的な見方や考え方の深まり⁽²⁾

3 社会科における対話

土屋(2011)は社会科のあり方を「人間社会の仕組みを学ぶ教科(とし)(省略)現代社会は民主的な社会なので(中略)民主的な社会を学ぶ(省略)そのために私たちが社会をよりよくするために私たちが何をすべきかを考える」⁽³⁾と述べている。民主的な社会とは民主主義である。

民主主義では、社会のあり方を決めるとき、よりよい社会を目指し、多くの人々で話し合い行われ、解決を探る。このことから社会科と対話は切り離せない。本校の社会科では社会的な見方や考え方を深めるための手段として対話を用いる。

また、安野(2006)は、社会科において対話とは『自分の「問い」を追求し、対話によって自分の「問い」をさらに深めていく(こと)。対話を通して他者と学び会い、考えを深めていく(こと)』であると述べている⁽⁴⁾。また、その著書の中で

社会科では自分と違った考えを持つ他者との対話を通して、「相手と自分との見方や考え方の違いがどこから生まれてくるのか」「相手の考えの根拠は何か」「自分と

相手を比べると、どっちがより妥当な判断をしているといえるのか」など、相手の存在を鏡に映しながら自らの見方や考え方、判断などをより確かなものにしていくこと⁽⁵⁾

このことから社会科の対話では「問い」と「考える」が重要となる。安野は「問い」と「考える」のやり取りが「一往復半 $+ \alpha$ 」になったとき、社会科の対話とした。それを表すと図3になる。

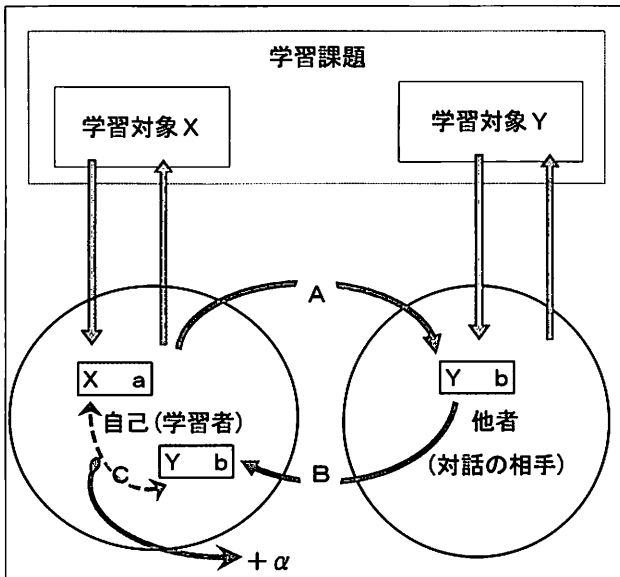


図3 一往復半の対話⁽⁶⁾

(1) 他との対話

他とは他者や資料、もの(図1では学習対象も含む)などをさす。学習対象との対話としては、学習課題を解決していくために統計グラフ・絵・写真などの資料から学習対象に対して自分なりの問いを持ち、様々な事実を読み取る。

Aの矢印は、自己から他者に対し、「このようなことではないか」等の推論を問いかける。自己の問いを投げかけることによって、そこから何らかの情報を得る。Bの矢印は、他者は投げかけられた問いに対し、自分なりに考え、解釈して返す。(AとBのやり取りで一往復となる。)

(2) 自己との対話

Cの矢印は、そのようなやり取りの中で、自問自答(相手にも届いていないため一往復ではなく、半分

とみなす)し、新たに吟味し、熟考している様子を示す。その自己との対話から新たな問い $(+ \alpha)$ が生まれ、他者へ投げかけられる。 $+ \alpha$ は、他者との対話を行った後、自らの見方や考え方、判断などをより深めたものとなる。

安野は「 $+ \alpha$ の対話こそが、社会科が対話型であるか否かを見極めるポイント」と述べている⁽⁶⁾。

自己との対話とは、他との対話を通して得た情報や知識を蓄積させることで、社会的な見方や考え方も深まっていくのである。

(3) 質の高い対話

授業において質の高い対話を行うためには、学習者(自己)の対話の相手(他者)との学習課題に対する異質性が高いか、が重要になってくる。

図1では共通の学習課題に対して、学習者、対話の相手もそれぞれ異なる学習対象(XとY)にアプローチすることになる。学習課題は一緒だが、学習対象が違うため学習課題に対する見方や考え方が違ってくる。これが異質性である。

その異質性が高いと対話の中でそれぞれが自分との違い、あるいは共通点を見つけ出そうとする。学習対象が同じものにアプローチするものと比べれば、異なった学習対象にアプローチすることが質の高い対話が生まれ、同時に学習者それぞれの見方や考え方が深まっていくのである。対話を通して、社会的な見方や考え方を深めあうことは、「公民的資質の基礎」を培うことにつながり、将来の社会参画を見据えた学習にも効果的である。

4 社会科と社会参画

一般的に参画とは参加とは違い、活動や行事・会合などに加わり、計画立案し、実際に運営に関わることを意味する。

唐木(2010)は社会参画について、その主体は「対等な構成員」で「自らの意思」で行動し「社会のあらゆる分野」で参画する機会が保証され、その「利益を享受する」その一方で責任感を持たなければならない⁽⁷⁾。と述べている。

これは、社会科の目標である「公民的資質」の育成につながる。しかし、社会科を学習する場において、生徒が実際に活動するなどの直接的な行動は、

時間、場所、人材など多くの面で制限を受け、積極的に関わることは難しい。そのためその授業では、社会参画を志向したものが中心となる。生徒が将来的に社会に参画できる資質や能力を育てるのである。それを唐木は「社会形成力」とした⁽⁹⁾。これは社会参画を志向するために必要な力であり、目標となるものである。

5 社会参画を志向した授業

唐木は社会参画を志向した授業を三分類し、社会形成力と関連させた。それが図4である。

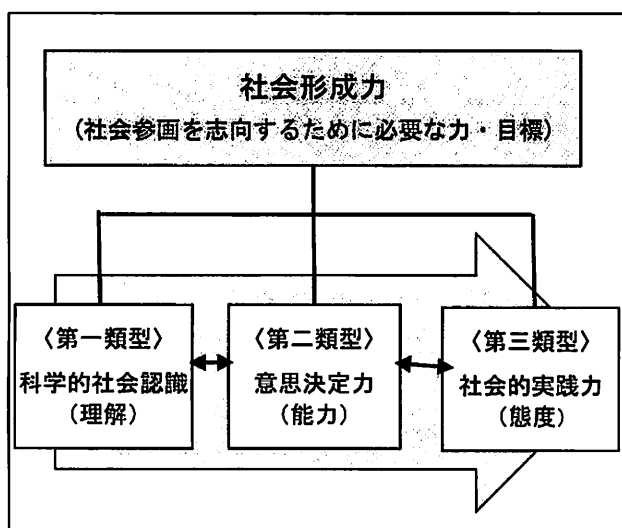


図4 社会参画を思考する社会科授業の三類型⁽⁹⁾

第一類型では、科学的社会的認識を持つためには、知識を他の知識と結びつける必要がある。そのためには、その関連性を構造的に理解しなくてはならない。それに加え、知識以外にも社会的見方や考え方も必要である。

第二類型では、意思決定をするためには、自分なりに課題を解決するために比較・検討・吟味する能力が必要である。それは自他との対話によって一層深めることができる。

第三類型では、第一・第二類型で身につけた科学的社会的認識や意思決定力を生かして社会的事象に対し、実際に行動に移す態度が必要である。

これは、第二類型は第一類型を、第三類型は第二類を身につけたことが前提であるが、その進度具合は、一方向のみではなく、双方向的であると考えられる。本校社会科では、知識構成型ジグソー法を通して実践していく。

6 教師の手立て

生徒が新たな社会的事象に出会ったとき、自分自身の考えを再構築し、これまで持っていた社会的見方や考え方をより深め、「どうすれば問題を解決することができるか」「よりよい社会を作ることができるか」など、将来を見据えて、社会的事象に対して、自分自身の考えを確かなものにできて、より深い理解ととらえることができる。そのため、社会参画を志向した授業には、次のような教師の手立てが必要となってくる。

(1) 効果的な問いの設定

社会参画を志向させるためには、学習課題の設定が重要である。教師は、学習課題をいかに生徒自身のこととしてとらえさせ、社会的事象に関心を持たせるものにできるか、がカギとなる。学習課題の解決には、統計グラフ・絵・写真などの資料を用いて、様々な事実を読み取り、自分なりの解釈をする。そこから導き出した知識や問いを持ち、エキスパート活動やジグソー活動で他者との対話を行う。

(2) 資料の作り込み

ジグソー法では各資料の準備を主に教師が担う。教師がどのような資料を準備するかによって対話の質が決まる。対話の活性化のため、そのエキスパート資料は共通の学習課題に対し、関連性を持たせながらも、いかに異質性のものを準備できるか、が重要である。そして対話を繰り返すことで、比較・検討・吟味し、社会的見方や考え方を深めさせることができる。その結果、クロストークでも多くの意見が交わされ、社会的見方や考え方が一層深まり、自分なりの考えを持つことができる。そのため教師は、生徒の発言が生きるよう、つなぐことが求められる。

7 学習の振り返りと評価

振り返り活動は、社会的事象の特色や意義を捉えさせるための重要な活動である。これまで学習してきたことを振り返り、まとめる活動で、それらの関係性や構造に気づき、さらなる課題追究へとつながっていく。また、評価については、評価場面・評価方法を選定し、どの場面でどのような方法で評価するのかを考え、指導と評価の一体化を図る。

IV 授業実践

1 1 学年実践事例【地理的分野】 「世界の諸地域 アフリカ州」 ーザンビアからみたアフリカ州ー

(1) 主題「アフリカが貧困と言われているのはなぜだろう？」

(2) 目標

- ・アフリカが貧困と言われている理由を、ザンビアの国を例として、4つの資料を読み取り、説明することができる。
- ・アフリカの貧困をなくすためには、どのような関わりが必要かをそれぞれの立場で考えることができる。

2 本実践の目的

アフリカ州の学習に至るまでに、アジア州・ヨーロッパ州の学習を通して、世界の諸地域についてはある程度理解はできているものの、アフリカ州は、私たちの暮らしの中で関わりが少なく、さらに小学校でもほとんど扱わない地域なので、イメージすることは、容易ではないと考えられる。そこで、アフリカ州の学習において、最初の3時間は、静態地誌的な単元構成で、アフリカの地形や気候の特色、植民地支配の歴史を知識として定着させ、「なぜアフリカは貧困といわれているのか」という課題を設定し、動態地誌的学習へとつなげていく。その際、ザンビアの国を取り上げることにした。今年、JICA主催の教師海外研修で約10日間アフリカのザンビア共和国へ滞在し、学ぶ機会を得た。そこで学んできたことを体験を交えながら教材化することで、よりリアルなアフリカの現状にせまることができる。さらに発展課題として、アフリカの課題や開発と展望について学習を深めていき、最終的には、今後、日本や自分自身がどのように関わっていけばいいのかを考えることで、本校社会科のめざす社会参画を志向した授業づくりにつながることを考え、設定した。

3 実践内容

「アフリカ州」の授業で、1学年全生徒(159名/1名欠席)へ事前アンケートを実施した。(2014/7)質

問事項は、(1)アフリカと聞いてイメージすること (2)アフリカ州にある国名をあげる (3)アフリカについてこれから学びたいことの3項目とした。集計結果は、下記の通りである。

質問事項1、アフリカと聞いてイメージすることをあげてみよう(複数回答可)

順位	イメージすること	生徒数
1	自然豊か・野生動物の宝庫	70名
2	肌が黒い	51名
3	暑い	48名
4	砂漠	46名
5	貧しい	35名

以下、6位 ジャングルが多い 7位 植民地 8位 サバンナ 9位 部族が多い 10位 発展途上国と続く。アフリカ州を学習する際、自然環境の回答がわりと多かったので、導入部分は、アフリカ大陸を大観させる意味でも、気候や大きさ(広さ)などを地球儀や地図帳などを活用し、知識の習得をさせた。

質問事項2、アフリカにある国名を知ってるだけあげてみよう

順位	国名	生徒数
1	エジプト	74名
2	ケニア	58名
3	マダガスカル	47名
4	ガーナ	39名
5	南アフリカ	38名

以下、6位 ナイジェリア 7位 コートジボアール 8位 コンゴ 9位 タンザニア 10位 ジャマイカと続くが、分からない(無回答含む)も26名いた。また、今回取り上げる「ザンビア」について、国名をあげた生徒は159名中2名だけで、知名度はとても低い。

質問事項3、アフリカについて学びたいことや調べてみたいこと

質問事項3に関しては、「アフリカの生活・文化・自然をもっと知りたい」という記述が最も多く、「植民地支配の歴史」、「貧困が多いのはなぜか」と続く。また、「特になし」「イメージができない」という記述も多く見られた。やはり、アフリカ州そのものが、私たちにとって遠い異国の地であり、イメージしに

くいものであるといえる。さらに、マスメディアの影響も強く受けており、アフリカイコール貧困という認識は、いまだ根強く残っている。しかし、アフリカは現在、急速な経済発展を続けており、世界中から投資が殺到し、日本企業のアフリカ進出も活発化している。そのような実情を踏まえ、「アフリカはなぜ貧困と言われているのか」をメインの学習課題とし、視点の違う4つの資料をもとに、生徒間の対話によって自己の考えを深め、事象を多面的に考察することが重要である。

(1) エキスパート活動(資料ザン・ビ・ア)

①エキスパート資料〈ザ〉【地理的位置と物流】

資料〈ザ〉では、アフリカ大陸の巨大さと海に面していない内陸国の多さに気づく。ザンビアなどの港を持ってない内陸国は、他国との協力なしには、貿易が成り立たない現状。つまり、経済発展が一国だけでは、物理的に難しく、道路や港が整備されていないと「モノ」も「ヒト」もまったく移動できない。移動するには、かなりの物流コストや人件費がかさんでしまうことを理解する。

②エキスパート資料〈ン〉【教育事情】

資料〈ン〉では、ザンビアの教育事情について、近年の経済発展に伴う国民生活レベルの向上でほとんどの子ども達が小学校に入学できるように成りつつあるが、急増する生徒を受け入れるための教室や教科書・教材などが追いついていない現状や、初等教育から中等教育に進む段階で様々な理由により就学する生徒が極端に減ってしまうことで、「学校に行けなくなると、将来どのような影響があるだろう?」という問いを設定。

③エキスパート資料〈ビ〉【保健・衛生問題】

資料〈ビ〉では、ザンビアの成人男性の10人に1人以上はHIVウイルスに感染しているとされ、体の抵抗力が落ち、結核やマラリアなどで若くして命を落とす人も多い。そこで、若年層の減少が社会に与える影響を考えさせる。

④エキスパート資料〈ア〉【経済事情】

資料〈ア〉では、アフリカ各国の主な輸出品のグラフから特定の産物や鉱産資源に頼るモノカルチャー経済についての課題を考えさせる。ザンビアの経済も60%以上を銅に依存しており、銅の価格によっ

て経済状態が左右される現状である。

(2) ジグソー活動(4名×10グループ)

課題を解決するにあたり、ザンビアの地理的位置と物流の関係、初等教育から中等教育へかけての就学率の低下が引き起こす識字率の問題、医療不足とHIV感染症による働き盛り(若年層人口)の減少、銅に依存するモノカルチャー経済などの問題等、それぞれ4つのエキスパート資料から知識を結びつけ、アフリカが貧困といわれている理由を各班話し合い、解を導き出す。

(3) クロストーク

クロストーク活動では、各班でまとめた考えを発表し、全体で共有する

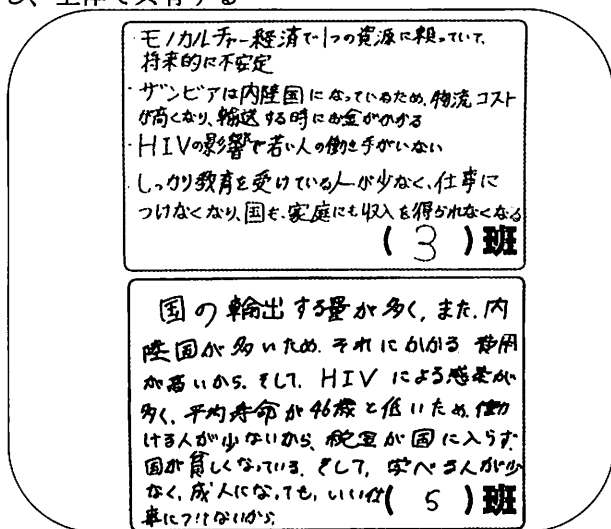


図5 班の考えをホワイトボードへ記入

その後、発展課題として、「アフリカ(ザンビア)の貧困をなくすためにできること」を考えさせた。以下に、その時の発表(発話)内容を示す。

Y: まずはじめに解決しなければならないことは、教育環境の整備だとおもいます。やはりきちんとした教育が受けられなければ、将来、就職するにも何かと困るんじゃないか。だから、国は、借金をしてもいいから教育に力を入れるべき。教育力が上がれば、それなりの就職ができ、借金はかえせるはず。

N: (Yの主張に対して)借金を確実に返せるという保障がないのに、国が借金をしてまで取り組むことは危険ではないか。貧困をなくすためにどれからではなく、実はつながって

て、1つ解決すれば、次も解決できるようになっているんじゃないかという気がします。
 教師：他にできそうなことはないかな？
 K：内陸国が多く、輸送コストがかかるということなのでヨーロッパみたいにしたらどうか？
 R：なるほど！EUみたいなかんじ？
 特産品を増やすってことは？
 銅に頼っているのだから・・・
 K：それなら技術を持っている技術者を派遣したほうがいい。

生徒Yの主張に対して、反論をしながら「貧困の連鎖」について気づき、知識の再構築を図った生徒N、生徒Kは、ヨーロッパ州で学習したことを活用し、主張、生徒Rの「特産品を増やす」に補足しながら技術支援を主張するなど、クロストーク活動で多くの意見が交わされ、遠く離れたアフリカを「自分事」のように捉え、課題を解決しようとする姿があった。

(4) 実践の考察

① 生徒の学習の評価

3名の生徒を取りあげ、同じ生徒の授業前と授業後の課題に対する解がどのように変化したかを記述してもらい、学習活動を振り返る。

課題「アフリカはなぜ貧困と言われているのか？」

表1 課題に対する授業前後の比較

(※生徒ワークシートより原文ママ)

生徒	授業前	授業後
生徒A	アフリカはヨーロッパの植民地で多くの鉱産資源が眠っているが、それを使う技術がなく、生活に困っていると思う。	モノカルチャー経済が多く、物流コストも高く景気が不安定で、学校に通えない子どももいて、学べないから貧困になっていくと思う。
生徒B	昔、植民地として扱われていたから	エイズ孤児も多く、十分な教育が受けられず、アフリカの発展を支える若者が育たないから
生徒	アフリカ大陸は、ほとんどが砂	アフリカ大陸は、内陸国が多く、物流コ

C	漠で農業に適さないから	コストが高いため、貿易するにもいろんな費用がかかるため経済が安定しないから
---	-------------	---------------------------------------

表1から、授業前の記述に関して、生徒ABは、植民地支配の影響、生徒Cは、砂漠という気候条件を「貧困」の理由に挙げており、いずれも1つの視点から記述がなされていたが、授業後は、モノカルチャー経済や物流コスト、教育事情などの視点も加わり、記述内容も増えた。また、下図6の学習の振り返りアンケートからも、アフリカに対するイメージが「だいぶ変わった・少し変わった」の両方を含めると9割以上の生徒に変化が見られた。それは、アフリカに対する既有知識が乏しかったことと同時に、「アフリカ＝砂漠・植民地・奴隷」などというステレオタイプが浸透していることが要因ではないかと思われる。

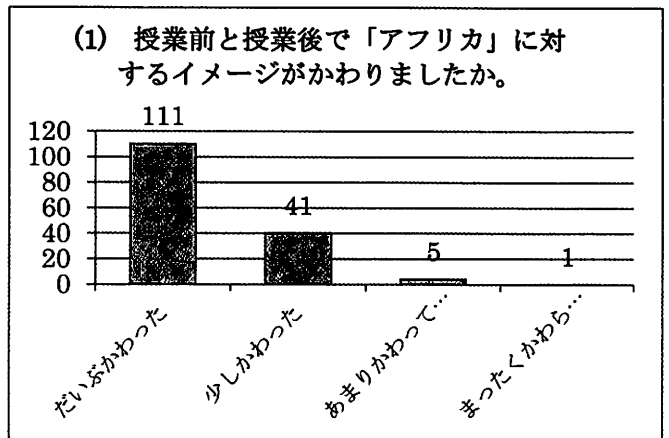


図6 授業後の学習振り返り

② 授業デザインの振り返り

今回、エキスパート資料を4つ準備したが、限られた時間の中で4つの資料を統合することを考えるとやはり、3つのほうが統合しやすく、効果的だと感じた。また、資料自体、解釈を迷っている場面が見受けられた。

③ 実践を踏まえた授業の改善点

学習課題に対するエキスパート資料の整合性。アフリカの単元ということで、「モノカルチャー経済」の資料を1つ作成したが、学習課題とかけ離れており、「モノカルチャー自体が貧困を生み出している」と誤解する生徒がでてきた。よって、エキスパート資料の改善・見直しが必要である。

IV 授業実践

1 2 学年実践事例【歴史的分野】

第2章 「新しい価値観のもと」

(1) 主題

「ペリーの琉球来航は、どのようなものであったか」 ～ 三つの視点から考えてみよう ～

(2) 目標

・ペリーの琉球来航について、エキスパート活動で課題に対する認識を持ち、ジグソー活動やクロストークを通して多面的・多角的に考察することで、来航がどのようなものだったのか、を生徒が個々の認識を深めることができる。

・そのペリーの来航について深めた認識をもとに、沖縄の現状について自分なりの考えを持つことができる。

(3) 本実践の目的

近年、日本の対外的な情勢は、アメリカや東アジアを含め、大きな変化を見せている。特に沖縄は尖閣諸島問題や基地問題など、その対外的な諸問題を身近に感じる場所といえる。

学習指導要領の歴史的分野内容(5)「近代の日本と世界」の内容イの中に「開国とその影響」については、「欧米諸国のアジア進出と関連づけて取り扱うようにすること」とある。当時の欧米諸国がアジアに進出していく中、江戸幕府もアメリカの太平洋戦略によって対外政策を転換し、開国を余儀なくされる。日本が開国を迫られていた時期にペリーが琉球へ頻繁に来航したことについて、多面的・多角的に考察することが、沖縄の置かれている現状を考察することにつながるのではないかと考えた。

ペリーが鎖国の時代に日本に来航したことは、ほとんどの生徒が知っている。それに比べ、ペリーの琉球来航については、知っている生徒はいるものの、その行動や来航の目的について、知識を持っている生徒は皆無である。認知度の高いペリーが身近な地域を訪れていることと関連づけることができれば、歴史的な事象をもっと身近に感じるができると思われる。一方、生徒たちは歴史的な事象を単なる昔の出来事と捉えがちであり、そのため現在との関わり

を考えることがむずかしい。しかしながら、ペリーの琉球来航は、現在の沖縄とアメリカの関係に相通ずるところがある。ペリーの琉球来航を理解することができれば、生徒は沖縄とアメリカの歴史的関連性から現在置かれている関係を見いだすことができると考えた。そのため「ペリーの琉球来航時と比べて、現在の沖縄とアメリカの関係は良くなっているか、悪くなっているか、それとも・・・」という発展的課題を設定し、授業実践を行った。

(4) 実践内容

授業実践を行うにあたり、10月に事前アンケートを実施し、ペリー及びペリーの琉球来航に関する生徒の認識を把握した。

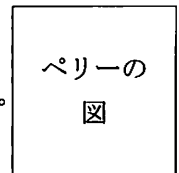
表2 授業事前アンケート

問1 右の人物を知っていますか。

はい	いいえ
100%	0%

問2 右の人物の名前を知っていますか。

はい	いいえ
94%	6%



問3 右の人物が日本に来た目的を書いて下さい。

正解	不正解
53%	47%

問4 ペリーが琉球に来航したことを知っていますか。

はい	いいえ
51%	49%

問5 ペリーの琉球来航の目的やそれに関する事で、知っていることを書いて下さい。

記入者	未記入
15% (21人)	85%

- ・ペリーの石碑がある (6人)
- ・ペリーらが旗を立てた旗立岩がある (3人)
- ・首里城に来た (2人)
- ・その他 (琉球にきたことは知っているなど)

(対象：中学2年生 155人)

その結果から問1・問2を考察すると、生徒のペリーへの認識は高い。これはペリーに対する興味関心が高いことと、ペリーの日本来航が小学校の既習内容であるためだと考えられる。しかし、問3では、ペリーの日本来航の目的を正確に答えられた生徒は半数ほどしかいない。これは既習の内容を忘れていた生徒が多いためと考えられる。今回はペリーの日本来航の目的と琉球来航には連続性があるため事前

にペリーの日本来航を学習し、その目的を理解させた。

問4からは、ペリーが琉球に来航したことを知っている生徒は半数ほどいた。これは多くの生徒が居住している本校周辺の市町村をペリー艦隊が通過していたり、そこに関連遺跡が残っていたりすることを考えると多いとはいえない。また問5の間に記述した生徒の少なさと、その記述内容が事実のみになっていることから生徒は、ペリー琉球来航に関心をあまり持っていないと思われる。それはペリーの来航に歴史的価値を見いだしていないためである。しかし、現在の沖縄の現状を考えると、ペリーの琉球来航の意義を理解することは重要である。そのため、オリエンテーションとしてペリー艦隊の隊員が描写した当時の風景や、関連書籍の図を提示し、興味関心を持たせ授業を展開していった。

① エキスパート活動

今回は、「ペリーの来航は、どのようなものであったか」という課題に対し、ペリー側、琉球王府側琉球の人々が受けた影響の三つの違った視点でエキスパートの資料を作成し、それぞれの視点で課題について考えさせた。

エキスパート活動(ペ)：「ペリーの目的」

エキスパート活動(ペ)は、ペリーの琉球来航をペリーの視点で捉えさせた。その内容は、ペリーは琉球に来航する以前から琉球に関心を示しており、上司のケネディ海軍長官宛てに頻繁に文書を送っている。その文書の内容と、ペリーの隊員たちが琉球で行った踏査活動や、首里城訪問した際の日誌の内容となっている。それら内容からは、ペリーは国益のためには、琉球を占拠するのは当然と考え、またそれを正当化している。琉球の人々に対しても、その意向を無視し、一方的に自分なりの解釈している様子が見られる。

エキスパート活動(ル)：「琉球王国側の対応」

エキスパート活動(ル)は、ペリーの来航を琉球王国の視点で捉えさせた。その内容は、琉球の役人たちがその来航に困惑し、ペリーらに自国を貧しく見せたり、偽物の王府を置いたり、監視人をつけ、庶民の外出を制限するなど、ペリーらに行ったさまざまな対抗策となっている。その内容から、ペリー

の外圧に対して、琉球の王府は武力で対応できないことを知っており、そのため、のらりくらりと柔軟に外圧をかわし、一日も早く琉球から立ち去らせた琉球王府の思いが読み取れる。一方、その政策はペリー艦隊の隊員らをイラつかせ、徐々にストレスを感じさせる結果となった。

エキスパート活動(リ)：「琉球の人々への影響」

エキスパート活動(リ)では、ペリーの琉球来航を琉球の人々への影響という視点で捉えさせた。その内容は、ペリー艦隊の隊員たちがおこした「まちでの押し買い」や「恩納番所での発砲事件」「ボード事件」など主な事件である。その内容からペリーの来航は、一般市民が多くの事件に巻き込まれ、その生活に影響が出たことが分かる。

② ジグソー活動(3人×13班 男女混合)

ジグソー活動では新たな班を編制し、エキスパート活動ペ・ル・リで各資料について深めた内容もちより「ペリーの琉球来航とはどのようなものか」という課題について対話を行った。視点が違った三つの知識を結びつけるためには、自分のものとの違いや共通点や関連性を見つける必要がある。それで対話の質が高まり、課題に対する認識が深められ、多面的・多角的に考察することにつながった。

図6はその時のあるグループのまとめである。

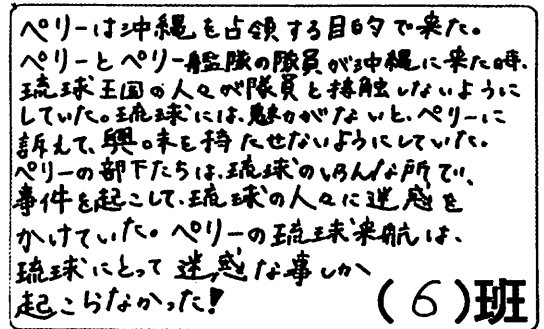


図6 ジグソー活動後のグループのまとめ

③ クロストーク

ジグソー活動で深めた知識や、それをもとに沖縄の現状を自分なりに考えるため「ペリーの琉球来航時と比べて、現在の沖縄とアメリカの関係は良くなっているか、悪くなっているか、それとも・・・」という発展的な課題を設定し、個人で考えさせクロストークを深めた。

④ 実践の考察

(ア) 生徒の学習の評価

ペリーの琉球来航は、日本への来航に比べ、認知度は低く、既成の知識が皆無の状態であったため、課題の解決が難しいかと思われた。しかし、全般的には、課題が身近な琉球での内容であったため、生徒は興味関心を持って、エキスパート資料をしっかりと読むことができ、課題解決に取り組み、自分なりの認識をもとと努めていた。

生徒たちは、ジグソー活動でも自分がエキスパート活動で理解したことを伝えようと努力し、また他者の説明に対しても積極的に聴き、課題に対する理解を深めようとする態度が見られた。その中でも個々を中心に考察して見たのが表3である。

表3 課題に対する生徒個人の変容

生徒A	授業前	無記入(琉球来航は知っている)
	ジグソー活動	米領にするために琉球に来たが、琉球が拒み続けた。それがペリーを怒らせた。長引いた結果、琉球が人を隠し、商売をさせなくし、米兵が暴れた。ペリーは琉球に悪影響を与えた。
生徒B	授業前	中城城跡に来た。
	ジグソー活動	アメリカが有利になるために琉球を占領しようとして来た。ペリーに対して琉球王国の対応はひどかった。またペリーの部下は琉球に対してひどいことをした。一番苦労したのは民間人だった。
生徒C	授業前	無記入(琉球来航も知らない)
	ジグソー活動	ペリーたちは、琉球を植民地にしようと思っていたけど、要求をあまり聞いてもらえないなど、不満がたまっていた。そして事件を起こした。

生徒Aは、ペリーが琉球に来航したことは、知っていたが、その目的は知らなかった。しかし、ジグソー活動後の記述では、3つの違う視点をしっかりと踏まえ自分なりの考えを導き出したことが分かる。

生徒Bは、琉球来航についてわずかに知識も持っていた。ジグソー活動後では、琉球王府の行為がペリー目線になっているが、琉球の人々が一番被害を受けたことはしっかりと認識したことが分かる。

生徒Cは、琉球に来航したことも、それに関する知識もなく、ジグソー活動後を見ても、話し合いの中で、自分のエキスパートと他のエキスパートを十分に関連付けることができず、ペリー側の視点のみから記入されていることが分かる。

(イ) 授業デザインの振り返り

授業デザインとしては、エキスパート活動で、ペリーの琉球来航について3つの異なる視点から生徒に考えさせ、その後のジグソー活動では、各エキス

パートの異質性を用いることで対話の質が高まり、課題に対し、多面的・多角的にアプローチすることができ、課題の認識が深められると考えた。

期待する解としては、ペリーの琉球来航はアメリカのアジア戦略の一環で国益重視であり、琉球王国の意向は無視されて進められた。それに対し、琉球の王府はさまざまな対策を実施し、ペリーたちをイラつかせ立ち退かせようとする。そんな中でペリー艦隊の隊員たちが様々な事件を起こし、それらの悪影響が琉球の人々の生活にでていた。そのため、琉球の人々は一番の被害者だった。

多くの生徒が3つの視点を踏まえて、上記のような認識を持つことができたが、表3の生徒Cのようにペリー側と琉球王府のやり取りに重点を置いてしまい、琉球の人々への影響がうまく表現されていない生徒も数名いた。これは、エキスパート(リ)が残りの2つのエキスパートの影響を受けて起こったものであり、その2つを理解できないとその原因に気づくことができず、エキスパート(リ)をうまく関連させることができなかつたからだと考える。そのためエキスパート(リ)の作成にあたり、歴史的事象だけを記載するのではなく、なぜそれが起きたのか、など因果関係を考える仕掛けを加える必要があったと考える。

今回は、対話によって社会的な見方や考え方が身につく、将来に社会参画ができるよう、社会参画を志向する態度を養う授業づくりを目的としている。

現在の沖縄の現状の認識を深め、自分なりの考えを生徒に持たせるため、ペリーの琉球来航という沖縄の現状と関連性のある歴史的事象の認識を深めさせる必要があった。その手段として、発展課題を設定した。発展課題は生徒が表現しやすいように「ペリーの琉球来航時と比べて、現在の沖縄とアメリカの関係は良くなっているか、悪くなっているか、それとも・・・」と選択制にした。これは関係の善し悪しを目的とする者ではなく、自分の考えをまとめ表現しやすくするためである。

表3のA・B・Cの生徒は、表3と同一人物である。課題に対して3つの視点の関係性を理解できた生徒は、現状の沖縄とアメリカの関係について歴史的事象と関連させ、自分なりに考えることができた。

それに対し、うまく関連づけられなかつた生徒は

一方的な認識で沖縄の現状について述べている。ジグソー活動での認識不足を補う対策としてもクロストークの充実が重要となってくる。

表4 発展課題に対する生徒の考え

生徒A	沖縄が損をしているのは、ペリーが来た時からと思った。ペリーが琉球に来た時、琉球には不都合な事しかなく、アメリカに良い方向ばかりに物事が進んでいた。それは今も同じでアメリカがいうことに文句ひとつ言わずに日本が従っていて、日本はペリーが来た時から損をしていると思った。
生徒B	ペリーの琉球来航時から、沖縄は迷惑を受けているなど思いました。ペリー来航時はアメリカが有利になるために、琉球を占領しようとやってきて、最後は日本が開国しなかったら危ないところまで行って、いろいろ翻弄されているし、来航中のペリーの部下は民間人に攻撃したり、自分勝手にいろいろやったりしている。第2次世界大戦で米軍基地が今は沖縄にあるけど、米軍が民間人を襲ったり非人道的な事をしたり、昔から沖縄に対する態度がひどいなって思う。どんなに反対しても基地は沖縄以外に移設しないみたいだし、結局は今も沖縄は日本政府とアメリカの取り決めて翻弄されているなどと思う。この関係性はペリーが来た時から続いているんだなと思いました。
生徒C	沖縄とアメリカの関係は良くなっている。沖縄に基地を置いて一部の人には不満を持たれているけど、この時の琉球がアメリカを完全否定している時と比べて、今はアメリカのエンターテイメントも入ってくるなど、だんだん良くなっている。

(ウ) 実践を踏まえた授業の改善点

「ペリーの琉球来航とはどのようなものか」という課題を設定し、エキスパート活動で3つの視点で捉えさせ、ジグソー活動で課題を解決させ、その深まった知識を持って、発展課題を自分なりに考え、全体でクロストークという流れで実践した。

学習課題が身近な沖縄の問題のため、興味関心は高く、エキスパート活動は熱心に行われた。しかし、ジグソー活動では「ペリーの視点」、「琉球王府の視点」、「琉球の人々への影響」をからませ、課題を解決するには少し難しかったように思える。

その解決には、エキスパート活動の際に課題解決の支援になるための小発問や吹き出しなどを作成するなど、資料やワークシートのさらなる工夫をする必要がある。一方、今回の授業に関しては、生徒は予備知識が乏しなため、前時にエキスパート資料を配付し、あらかじめじっくり読んだ後、授業を実施したので、ジグソー活動まではスムーズに進めることができた。しかし、クロストークをジグソー活動の後と、発展課題の後に実施したため、クロストークが分割され中途半端になり、話し合う時間を十分に取ることができなかった。

今後は発展課題を設定した場合は、ジグソー活動を通してグループで課題解決を行い、その後は他のグループと意見交換程度にとどめ、その認識をもとに、発展課題について個人の考えをまとめさせる。そしてクロストークを通して比較、検討、吟味し、自分の考えを再構築させることで、考えや見方の深まりに結びつける。その方が授業の流れとしてはスムーズになると思われる。

表5 授業後の生徒アンケート (%)

A(できた)←→D(できなかった)		A	B	C	D
①	課題について自分のエキスパートを説明することができたか	69%	29%	1%	1%
②	課題について、ジグソー活動を通して理解が深まった	82%	17%	0%	1%
③	現在の沖縄について、自分なりの考えを持つことができた。	65%	34%	0%	1%

(対象：中学2年生 140(人))

表5の授業後の生徒アンケート結果を見ると、項目①のエキスパート活動や、項目②ジグソー活動について「できた」の割合が多い。他者の言葉の伝達ではなく、自分なりに理解し、考えを導き出したと生徒たちも感じている。これは認知度の高いペリーが身近な地域を訪れていたことへの興味関心と、事前にエキスパートの資料をしっかりと読み、内容をある程度理解していたためだと考える。また、項目①より②で理解度が高まった理由として、エキスパート(リ)の難しさがあるものの、生徒たちは各エキスパートを関連させることで課題に対する理解が深まったと考えているからである。

項目③は、ジグソーで得た知識をもとに、現在の沖縄と比較、検討、吟味し、自分の考えを再構築する必要があるため、少し難解であり「できた」の割合が他の項目より低くなったと思われる。しかし、難しい内容ではあったが、発展課題の個々のまとめを見ても歴史的な事象を踏まえて、自分の考えを表現した内容となっている。

社会参画を志向させるためには、学習課題の設定が重要である。社会的な事象に関心を持たせ、生徒自身のこととして捉えさせることのできる学習課題にする。そのためには教師の学習課題設定の工夫が必要であり、それを解決するためのエキスパートの資料選びも重要になってくる。今後は、生徒の実態に即した研究をよりいっそう進めていきたい。

IV 授業実践

1 3 学年実践事例【公民的分野】

「第2章 国民主権と日本の政治」
～暮らしを支える地方自治～

(1) 主題

これからの地方自治を考えるため、沖縄県の現状から、観光産業で自立するためには何が必要か考えよう。

(2) 目標

本単元は、学習指導要領公民的分野、内容(3) 私たちと政治、イ、民主政治と政治参加の中に位置付けられ、地方自治の基本的な考え方について理解させ、地方自治の発展に寄与しようとする住民としての自治意識の基礎を育てることを目的としている。

沖縄県の抱える課題も「基地」「経済」「社会保障」「雇用問題」等様々な問題が複雑に絡み合い、それを取り巻く社会状況も日々変化している。その中で「沖縄県の現状と課題」をとらえさせ、「沖縄県が観光産業で自立するためには何が必要か？」本授業を通して学び、考えて、住民としての自治意識を持たせるようにした。そのためには地方自治の基本的な内容、地方公共団体の仕事と財政を学習し、実際に沖縄県の状況を様々な資料から多面的、多角的に考えて沖縄県の将来を担う生徒になってほしいと考えた。

表6 学習前アンケート抜粋

1 沖縄県の政治・経済に興味がある。				
ある	どちらかといえばある	どちらかといえばない	ない	わからない
16%	40%	24%	16%	3%
2 沖縄県の政治・経済を学習することは必要だと思う				
必要	どちらかといえば必要	どちらかといえば必要ない	必要ない	わからない
62%	32%	3%	0%	3%
3 今後、沖縄県で発展すると思う産業は？				
農業	製造業	IT産業	観光産業	その他
2%	3%	6%	88%	1%
4 あなたが思う沖縄県の課題は？				
基地	観光	教育	財政	その他
56%	3%	24%	5%	12%

(対象：中学3年生 156名)

(3) 本実践の目的

地方自治のキーワードとして「自立」があげられ、単元のまとめとして沖縄県の現状や課題、これから自立していくために何が必要かを授業で考えさせた。その際、エキスパートの資料として「観光産業」「基地と経済」「全国から見た沖縄県の特性」の3つの資料を使い、ジグソー活動、クロストークを通して自分なりに課題に対して理解し、考えを深めさせた。また、発展課題として「観光産業で自立するためには」を設定し、これからの沖縄県について自分なりに考えることができるようにした。

(4) 実践内容

① エキスパート活動

エキスパート活動A：「観光産業」

沖縄県の入域観光客数と観光収入の推移、国内客の地域構成比、外国客の国籍構成比のグラフから観光産業の現状と課題を見つけ出し、沖縄県が自立するために何が必要か考える。(以下生徒のワークシートより)

- ・観光客は年々、増加している。
- ・観光地のPRをもっと行う。
- ・観光客(外国人)を増やす。アジアが多い。
- ・観光関連収入をあげたら自立できる。
- ・さまざまな言語に対応できる人材が必要。

エキスパート活動B：「基地経済」

沖縄県にある米軍基地、米軍基地関係収入と観光収入の推移、基地跡地の経済状況のグラフから基地と経済がどう結びついているのか、将来どのような状況になるのかを予想し、沖縄県が自立するために何が必要か考える。(以下生徒のワークシートより)

- ・基地を徐々に減らしていく。
- ・基地に頼らないで観光に力を入れる。
- ・基地返還跡地に観光地をつくる。
- ・基地跡地に観光地をつくると、働く人が増える。

エキスパート活動C：「全国から見た沖縄県」

沖縄県の上位3位、下位3位の項目を示した統計資料から、沖縄県の優位性や課題をとらえ、沖縄県が自立するために何が必要か考える。(以下生徒のワークシートより)

- ・進学率が低い。失業率が高い。所得が低い。
- ・第二次産業の割合が低い。バランスをとる。

- ・学力面での課題が多い。
- ・人口について1位が多く教育関係は最下位が多い。
- ・高校、大学への進学率を上げる。所得を増やす。

② ジグソー活動

エキスパート活動で得た知識をもとに「観光産業」「基地」「沖縄県の優位性と課題」の視点から「沖縄県が観光産業で自立するためには何が必要か」自分なりにまとめ、学習課題について班で話し合い、考えを深めていく。

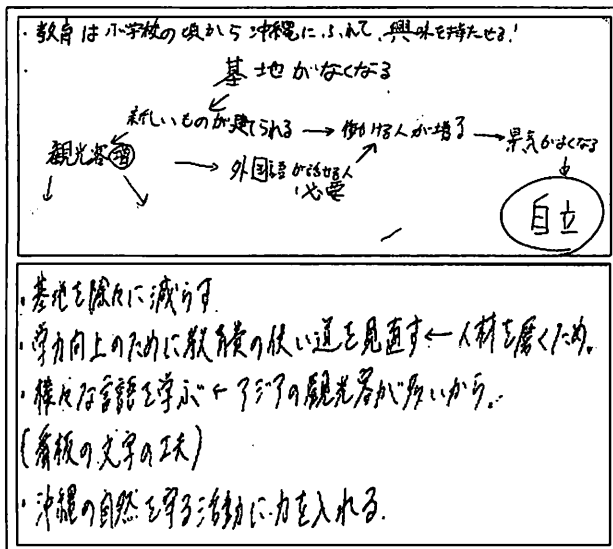


図7 生徒のワークシート

生徒のワークシートから、エキスパート活動で得た知識をつなげ、対話を行うことにより自分なりの考えをまとめ、発展課題に取り組む様子が見えた。

③ クロストーク

発展課題について話し合ったことをまとめ、発表し全体で共有する。その後、ジグソー活動で考えたことを振り返り自分の考えを深めていく。

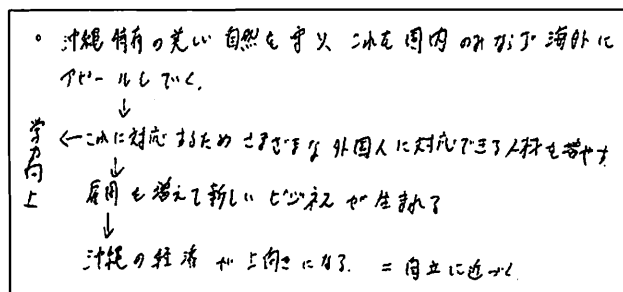


図8 生徒のワークシート

図8はジグソー活動でまとめた考えと、各班の意見を比較・検討・吟味し、自分の考えを再構築し

た様子が見られ、自分なりの考えを深めることができるようになった。

④ 実践の考察

(ア) 生徒の学習の評価

沖縄県の観光について今までの学習や新聞、ニュース等でさまざまな知識を持っていることは予想できた。「観光地をつくる」「企業の誘致」など。しかし、今まで学習してきた地方自治の課題である地方財政と結びつけて考えることは難しいと感じた。

地方自治では、住民としての自治意識の基礎を育てることが重要なので、自分たちの地域、将来をしっかりと考え、学習内容を自分事として捉えさせることが大切である。

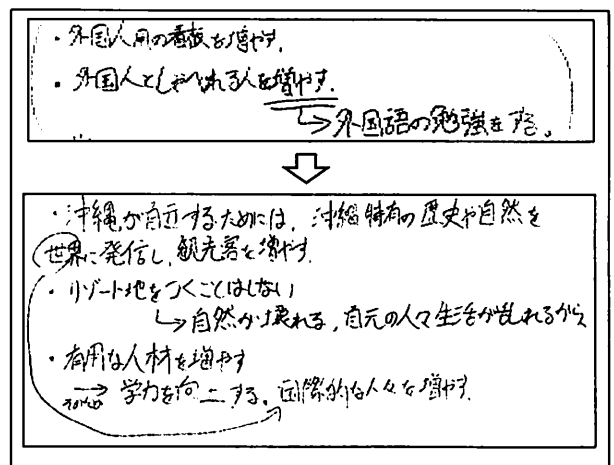


図9 生徒A 授業前、授業後のワークシート

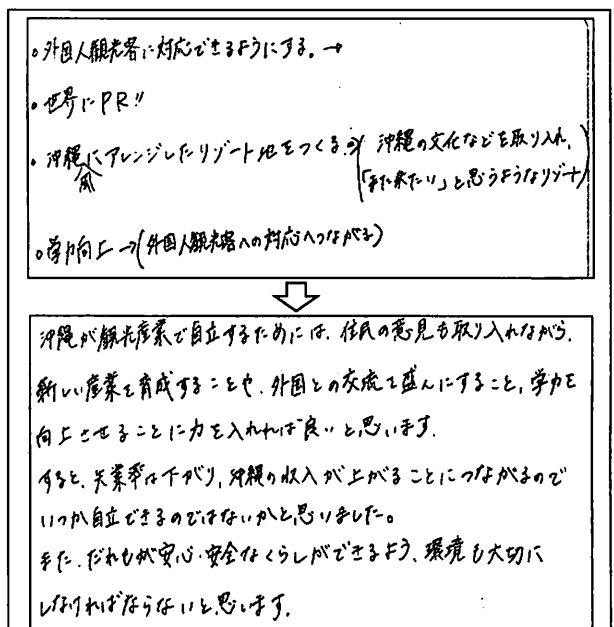


図10 生徒B 授業前、授業後のワークシート

授業前、沖縄県の観光産業についての既習知識(リゾート地、自然、歴史文化など)はあるが、現状と課題に結びつけて考える生徒は少なかった。

授業後、自立するためにはどうしたらよいか沖縄県の現状と課題、観光産業を結びつけて考えることができるようになり、「失業率を下げる」「外国人観光客を増加させるための方法」「人材育成」等、具体的な方法を考えることができた。

(イ) 授業デザインの振り返り

課題に対して出してほしい答えとして次のように考えた。

- ① 観光産業で自立するためには、観光客の増加が必要。そのためには観光施設の整備や新しい観光地の建設が考えられるが、自然環境を破壊しないように進めていかなければならない。
- ② 外国人観光客を増やすことも課題であり、そのためには設備の充実はもちろん人材育成が大切になってくる。
- ③ 以上のことを実現するために、どのようにして財源を確保していくのか考える。

上記①、②に関してはジグソー活動、クロストークを通して他者との対話を行い、自分なりの考えを持ち、他者と意見と比較、吟味、検討し、自分の考えを再構築することができた。

上記③の財源の確保については、既習知識である沖縄県の財政と結びつけて考える班が2グループしかでてこなかった。そこで対話を深める発問を行い、企業の誘致が税収の増加につながることで、雇用を確保し所得増加につなげることによって経済活動が活発になるなど、具体的に考えさせるように教師の支援を行っていかなければならない。



図 11 ジグソー活動の様子

(ウ) 実践を踏まえた授業の改善点

生徒は地方自治のキーワード「自立」についてエキスパート活動で得た知識をもとに、ジグソー活動までは課題に対して考え、まとめることができた。

エキスパート資料から課題について考えることはできたと思うが、沖縄県の財政と財源確保の視点から考える事ができなかった。そのためのエキスパート資料の精選、具体的に考えられる課題設定の改善が必要である。

発展課題「観光産業で自立するためには」と視点をしばったので、生徒はイメージしやすかったと思うが、これまでに学習した地方自治の現状と課題、エキスパート資料をつなげて考えをまとめることが難しかったと感じた。これからの観光産業について新しい観光地の開発、自然環境を守る、人材育成、財源等、具体的に考え、対話を活発に促す教師の支援が必要である。

ジグソー活動では生徒が活発に話し合い、発展課題に対して具体的に考えることができた。しかし、クロストークでの各班の発表を聞いて、考えを共有するまではできたが、意見の比較、吟味、検討を行い、新たな問いを見つける班が出てこなかった。生徒や班の発表から新たな問いに気付かせる発問や教師の支援が必要である。そこを改善してより深みのあるクロストークを行い、社会的事象に対して自分なりの考えを持ち、将来、社会に参画できるよう、社会参画を志向する態度を養っていきたい。

V 成果と課題

1 成果

- ・三分野で世界、日本、沖縄で起きている社会的事象を授業で取り上げることで、自分の事として学ぶ事ができ、社会参画の志向を意識させることができた。
- ・課題解決後に新たに発展課題を設定し、生徒各自で考えさせることで、課題に対する思考の広まり、深化がみられ、クロストークで自分の考えを表現しやすくなった。
- ・年間を通して各分野で平均3回程度、定期的に知識構成型ジグソー学習を実践することができた。
- ・学力の低い生徒も意欲的に学習し、自分の役割を果たそうと努力している姿が見られた。

2 課題

- ・エキスパート資料の難易度について、それぞれに差があり、統合できない生徒がいた。その生徒らの理解度を高めるために、ジグソー活動の充実を図るため、ワークの作成や教師の発言などの工夫が必要である。
- ・エキスパート活動で、グラフ・年表・写真などの図が意図している内容について、生徒の読み取りが弱かった。今後は、図の読み取りを日頃の授業から強化していきたい。
- ・クロストークを円滑に進めるため、教師の立ち位置や、教師からの発問の投げかけなどをもっと明確にする必要があった。
- ・評価の具体的方法が確立できなかった。他教科のものを参考にしながら教科で検討し、評価仕方を研究していきたい。

力者会議配付資料)、資料 3-1 社会科、地理歴史科、公民科の現状と課題、改善の方向性 (検討素案)

引用・参考文献

- (1) 岡崎誠司、「見方考え方を成長させる社会科授業の創造」、風間書房、2013年、p16
 - (2) 同上、p16、図 1-6 を参考に作成
 - (3) 土屋武志、「解釈型歴史学習のすすめ」、梓出版社、2011年、p95、括弧内筆者
 - (4) 安野功、「社会科授業が対話型になっていますか」、2006年、p13
 - (5) 同上、p157
 - (6) 同上、p60 の下図および、p66 の図 3 を参考に作成
 - (7) 小島弘道監修「社会参画と社会科教育の創造」、学芸社、2010、唐木清志、第 1 章社会参画と社会科 pp7-8
 - (8) 同上 p25 の図 1.1
- ・文部科学省、「中学校学習指導要領社会科編」2008年
 - ・文部科学省、「言語活動の充実に関する指導事例集」中学校版、2011年
 - ・琉球大学教育学部附属中学校「研究紀要」第 26 集 2014年
 - ・田中勉 「使える社会科ベーシック 2」2004年
 - ・梶田叡一他、「言語力を育てる授業作り」、図書文化、2009年
 - ・文部科学省、(平成 19 年 8 月 16 日言語力育成協